

Title	はじめに
Author(s)	聖学院大学総合図書館
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55 別冊, 2013.3 : 3-9
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4999
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

はじめに

本『紀要別冊』に収録した論文は、二〇一〇年度から開始された「日韓関係一〇〇年（一九一〇—二〇一〇）」と日韓キリスト教会の交流に関する日韓共同研究」（日韓教会交流史研究と略称）の第三年度である二〇一二年一月に開催されたシンポジウム「一九四五年以降のデモクラシー憲法と両国教会・世界情勢」で発表されたものである。韓国・長老会神学大学校との協定に基づく三年計画の最終年度であり、ここで本研究が計画された目的と研究計画を確認しておきたい。

1. 池明観、康仁徳客員教授からの提案

日韓併合一〇〇年に当たる二〇一〇年を起点とした「日韓関係一〇〇年（一九一〇—二〇一〇）」と日韓キリスト教会の交流に関する日韓共同研究」の計画を提案されたのは、総合研究所の池明観教授と康仁徳のおふたりの客員教授であった。二〇〇九年二月のことである。

戦前戦中戦後と、日韓関係の大きな課題を見つめ、しかも政治だけでなく文化的にも日韓交流の重要性を指摘し、また政策を実現してこられたおふたりの教授からの提案であることに、まずこの共同研究の画期的な意義がある。特に池教授は『日韓キリスト教関係史資料集』の編集を主導されるなど日韓研究を推進してこられた方である。池教授が強調

されたことは、「将来を見据え、日韓キリスト教会の協力基盤を形成するために、日韓の研究者が教派教団を超えて、共同研究をはじめてはどうか」、ということであった。

2. 研究の目的、研究の方法、共同研究グループ

研究の目的

共同研究の目的は、第一に「日韓のキリスト教史を、一九一〇年を起点に、日韓関係の未来に向けて前向きに捉えなおすことである。北朝鮮、中国を視野に入れ、北東アジアのキリスト教会のこれからの交流と協力の基盤を築く」ということであった。

この一〇〇年を三期に分け、研究を進める。

第一期 「三・一運動と日韓キリスト教会」

第二期 「三・一運動以降の日韓キリスト教会」

第三期 「一九四五年前後日韓キリスト教会とそれ以降の日韓関係をめぐって」

第二の目的は、単にキリスト教史の振り返りだけではなく、「日韓両国の市民社会の形成とキリスト教——北東アジアの平和と協力をめざす日韓キリスト教会」であり、北東アジアの平和に対するキリスト教会の使命を明らかにすることである。

日韓併合に対する日本のキリスト教会の立場は、組合教会などの立場が研究されてきているが、日本基督教会（旧日基）、その他の教会ではどのような立場を取ってきたのか。教派を超えた研究が必要とされた。

また一九七〇年代の韓国民主化の動きの中では、日本に、キリスト教長老派など進歩的な教会の動向と神学の情報が

もたらされてきたが、韓国のキリスト教の多数を占めるイエス教長老派（合同派、統合派）など保守的な教会の動きはほとんど情報が入らなかった。このような情報の空白を埋めていくことは、今後の日韓のキリスト教会の交流を深め、発展させていくためには不可欠の作業である。

研究方法

①聞き取り調査（日本、韓国）。関係の教団または教会を訪ね、関係者に聞き取り調査をする。日韓のプロテスタント教会が重要な教会を訪ね、聞き取り調査をする。

②日韓のそれぞれの教団、教会の総会資料などを調査し、各時期に日韓のキリスト教の交流をどのように捉えていたかを分析する。

特に、資料は日韓双方でデジタル化して保管し、利用できるようにする。

③国際シンポジウムの開催。二〇一〇年度以降に、日韓の研究者による国際シンポジウムを開催する。この研究成果を日本語、韓国語、英語で出版する。

実際には、②の教団、教会の総会資料の調査は進められ、『韓国基督公報』（一九四五―一九九九）、『基督申報』（一九一五―一九三七）、『総会資料』（一一一六巻）、*The Korea Mission Field (1905-1941)*（いずれも韓国教会史文献研究院が復刻）などの貴重な資料を収集できた。①は実施されなかった。若干資料収集のために聞き取り調査がなされた程度であった。③は、次の項目に記すように、三回開催された。

共同研究グループの構成

長老会神学大学校と聖学院大学総合研究所日韓現代史研究センターが中心となって共同研究グループを構成した。必

要に応じて、「韓神大、聖潔大、延世大などの研究者にも参加を呼びかける。また日本では、同志社大学などにも呼びかける。また教会としては、日本基督教団滝野川教会など、韓国では、永樂教会、セムナン教会、ソマン教会などに呼びかけ、研究成果の公開に関して協力を依頼する」こととなった。

これも、教派教団を超えた呼びかけを目指したが、実際は広がらなかった。

共同研究の準備

二〇〇九年五月から総合研究所、高萬松助教が長老会神学大学に教授交換として滞在し、この共同研究の準備をはじめた。また、同年九月から総合研究所、宮本悟准教授が同様に教授交換として滞在し研究の準備を進めた。この期間に、長老会神学大学が、李致萬氏を担当として採用することが決まり、より具体的に研究活動の内容とスケジュールが決まった。なお李教授は、二〇一〇年三月末に来日し、共同研究の打ち合わせをした。

3. シンポジウムの開催

以上の計画に基づいて、研究成果を公開するために、以下のようにシンポジウムが開催された。

第一回 二〇一一年二月一日、聖学院本部新館会議室

主題 「一九一〇年から一九四五年までの日韓教会交流」

講演 1 「一九一〇年までの日本側から見た日韓キリスト教会交流」

同志社大学神学部教授 原 誠

コメント 聖学院大学総合研究所助教 松本 周

講演2 「一九一〇年から一九四五年までの日本側から見た日韓キリスト教会交流」

早稲田大学アジア研究機構助手 松谷基和

コメント 聖学院大学総合研究所助教 高 萬松

講演3 「韓国側から見た韓日キリスト教会交流」

長老会神学大学校研究教授 李 致萬

コメント 聖学院大学総合研究所准教授 宮本 悟

このシンポジウムの報告は、松本周「日韓教会交流史研究会」『聖学院大学総合研究所Newsletter』20-5、二〇一〇年にある。

第二回 二〇一一年一月二五日、長老会神学大学校世界宣教センター

主題 「三・一独立運動と民族自決主義」

講演1 「三・一運動の準備過程とキリスト者の役割」李 致萬

コメント 聖学院大学総合研究所教授 松谷好明

講演2 「一九一〇年代の日韓教会とリベラル・デモクラシー」松本 周

コメント 長老会神学大学校 パク・ヨンクオン

このシンポジウムの原稿は、『紀要』五三号に収録している。

第三回 二〇一二年一月三日、聖学院本部新館会議室

主題 「一九四五年以降のデモクラシー憲法と両国教会・世界情勢」

講演1 「一九八〇年代における南北統一運動のための日本教会の役目と寄与」李 致萬

コメント 聖学院大学総合研究所特任教授 東野尚志

発表 「日韓会談反対運動と日韓教会交流——一九六〇年代を中心として」高 萬松

講演2 「一九四五年以降の北東アジアと教会——日本国憲法との関わりから」松本 周

コメント 長老会神学大学校教授 アン・ギョソン

4. 研究成果の公開

本研究の成果としては、以下の論文がある。

高萬松 「戦後の韓国長老派教会と日本基督教団の交流の事情——一九六七年宣教共役に至るまでの日韓教会交流（関係）の歴史研究（第一回）」『紀要』五一号、二〇一一年

同 「一九七〇年代韓国教会の社会参与に関する神学の考察——一九七〇年代前半、日韓教会交流に関わった長老教派を中心に 日韓教会交流（関係）の歴史研究（第二回）」『同上』五二号、二〇一一年

同 「日韓会談反対運動と日韓教会交流——日韓教会交流（関係）の歴史研究（第三回）」『同上』五三号、二〇一一年

同 「韓景職牧師の民主主義観——日韓教会交流（関係）の歴史研究（第四回）」『同上』五五号、二〇一三年

Mansong Ko, Footprints of Interchurch Exchange between Korea and Japan: With Special Reference to the Situation of the

Two Countries from 1945 to 1967, the Year of the Mission Agreement. 『同上』五四号、二〇一三年

——, “Japanese and Korean Church Relations from 1945 to 1967: The Path to Reconciliation,” Atsuyoshi Fujiwara and Brian Byrd eds., *Post-disaster Theology from Japan*, Seigakuin University Press, 2013.